

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

着せかけて選ぶセーター誕生日

大和市 河村 笑

△評▽相手と一緒に誕生日プレゼントを買いに来た。「着せかけて選ぶ」に仲のよい様子が見えて好もしい。

デパートの屋上の椅子秋夕焼

前橋市 山本 亨

△評▽何の用があつてここに居るのか。自分のためにそこにあるようにさびしげな椅子。

雨降れば暮るも早し崩れ築

北九州市 宮上 博文

出席の返事夜寒のポストまで

宮崎市 齊藤 豊

小鳥来る学校前の文具店

東京 徳原 伸吉

山里の防獣ネット豊の秋

小林市 黒木 暢

白き影カーブミラーに雪女

香芝市 山本 合一

義士の日のパンタグラフに散る火花

京田辺市 加藤 草児

秋夕焼今日も一日働けり

みよし市 乾 収

回廊や菊の香消えぬ夕まぐれ

館林市 坂口いちお

西村 和子選

駄菓子屋に大人の遊ぶ文化の日

東久留米市 夏目あたる

△評▽季語の置き方が絶妙。つましかなかった時代の、ささやかな楽しみが懐かしい。これも食文化の一つと言えよう。

小春日やころころ笑ふ女の子

雲南市 熱田 俊月

△評▽童女の笑い声を耳にして、季節を実感したと同時に心がほぐれたことも伝わってくる。

人が人を待つ棧橋や秋寂し

大阪市 福永 都女

浮寝鳥翔たせ舟屋の舟戻る

枚方市 門川 清秀

咲き揃ふ秋明菊になほつぼみ

千葉市 畠山さとし

朝刊をまた読み返す夜長かな

神戸市 岸下 庄二

野良猫に作る時も冬支度

加古川市 伏見 昌子

ビル街のお稲荷様へ今年酒

館林市 坂口いちお

好きな句を投票箱へ文化祭

狭山市 小俣 友里

柿熟るる大字小字晴れ渡り

神奈川 新井たか志

井上 康明選

ことごとく言葉なりけり冬の風

川越市 峰尾 雅彦

△評▽言葉は恨みや怒り、あるいは恐怖、高笑いかもしれない。冬の風は電線を鳴らし、やぶをざわめかせ、絶え間なく吹きつける。月に吊り日に晒したる干菜かな

北九州市 宮上 博文

△評▽干菜はカブや大根の葉。初冬の澄んだ月、さびさびとした日を浴びながら甘みを増していく。

トレードの速報流る今朝の冬

奈良市 奥 良彦

兄ひとり姉ふたりあり秋彼岸

つくば市 有阪 貴男

現金を使はぬ生活文化の日

奈良市 梅本 幸子

流れきて岸に山柿うちよする

甲府市 清水 輝子

大声の人の手を借り大根干す

藤枝市 山村 昌宏

駅までは五分の下宿隙間風

浜松市 久野 茂樹

ワクチンも七度目となる忍冬忌

東京 野上 卓

柚子の香のたつぷりとあり永平寺

久留米市 持地 恒美

片山由美子選

立冬のまぶしさの中歩きをり

狭山市 小俣 友里

△評▽初冬の晴れた日は思いのほか日差しが強くなる。「歩きけり」ではなく「歩きをり」としたことによって臨場感が出た。

父母のどちらにも似ず七五三

鎌ヶ谷市 海野 公生

△評▽父似か母似かなどの句は多いが、どちらにも似ていないというのでユーモアが生まれた。

小夜時雨半客ひとり又一入

加古川市 伏見 昌子

茶の花や立札のみの屋敷跡

大阪市 隠樹ノリエ

九十の記憶をたどる夜長かな

有田市 谷中 節子

昼過ぎの雨の小やみに三の酉

日野市 田村登代子

冬かもめ四本マストの日本丸

倉敷市 中路 修平

秋の暮海に大声出してをり

奈良市 浦城 亮祐

山茶花やふるさとはいまタムの底

羽曳野市 鎌田 武

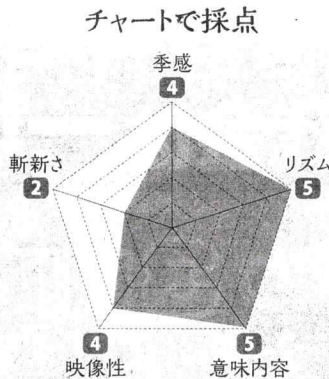
スクリーンの余韻のさめぬ初時雨

松山市 井上 保子

すねる子にとんぼり二二三三

注目の一句

塩見恵介



同世代の遊びで意に沿わぬことがあった幼子を大人が取りなしている。とんぼりを1個ずつ渡されて不機嫌さが少しずつほぐれていく子。くっつきの一団だ。とんぼりと子供の配合は通俗的ながら、「二二三三」という形でどんぼりを渡される提示が時間的な経緯を示しつつ、リズムを作っている。最後の「三三」も「満つ」の音韻に呼応して機嫌の回復を思わせる。

数字の読み込まれた句としては阿波野青畝の「牡丹百二百三百門一つ」などの空間的な奥行き提示法もある。そういえば「かくれんぼ三つかぞえて冬になる」(寺山修司)も冬の句。冬の句には存外数字が似合う。いよいよ年の瀬、「数字日」の季節。

(しおみ・けいすけ) 俳人

アプリ 俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 毎日新聞社は富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら